

授業づくりと評価の手引き

基礎編 改訂版

この手引きは、全ての教科における指導場面での基本事項の確認用ハンドブックとして、日々の授業実践の中で心がけておきたいことを取り上げ解説したものです。

この手引きを活用して、生徒の確かな学力の定着・向上を図るため、毎日の授業を振り返りながら授業力を高めてください。

平成25年3月改訂

山口県教育委員会

目次

第1章 授業づくりの基礎・基本について

	ページ
1 めざしたい授業	1
2 求められる授業力	1
3 生徒の主体的な活動を引き出すためには	2
4 学習内容の定着を図るためには	2

第2章 学習指導の在り方などについて

5 生徒への効果的な説明、指示、発問	3
6 板書で気を付けること	4
7 ノート指導で気を付けること	4
8 教材の精選や開発のポイント	5
9 授業プリント（ワークシート）の作成のポイント	5
10 学習形態をどのように取り入れるか	6
11 ICTの効果的な活用方法	7

第3章 授業の振り返りについて

12 授業改善の効果的な方法	9
13 授業評価の効果的な方法	10

第4章 学習評価について

14 新しい学習指導要領における学習評価の観点	11
15 学習評価の基本的な考え方	12

第1章 授業づくりの基礎・基本について

1 めざしたい授業

あなたがめざしたい授業をイメージしてみましょう。

① 目標がはっきりした授業

- 中・長期目標（1年～3年間）及び短期目標（考查ごと、単元ごと、単位時間ごと）を意識して授業に臨んでいる。
- 毎時間、明確な目標を設定し、その目標のもとに授業を組み立てている。
- その時間の目標を生徒がはっきりと理解している。

② めりはりのある、生き生きとした授業

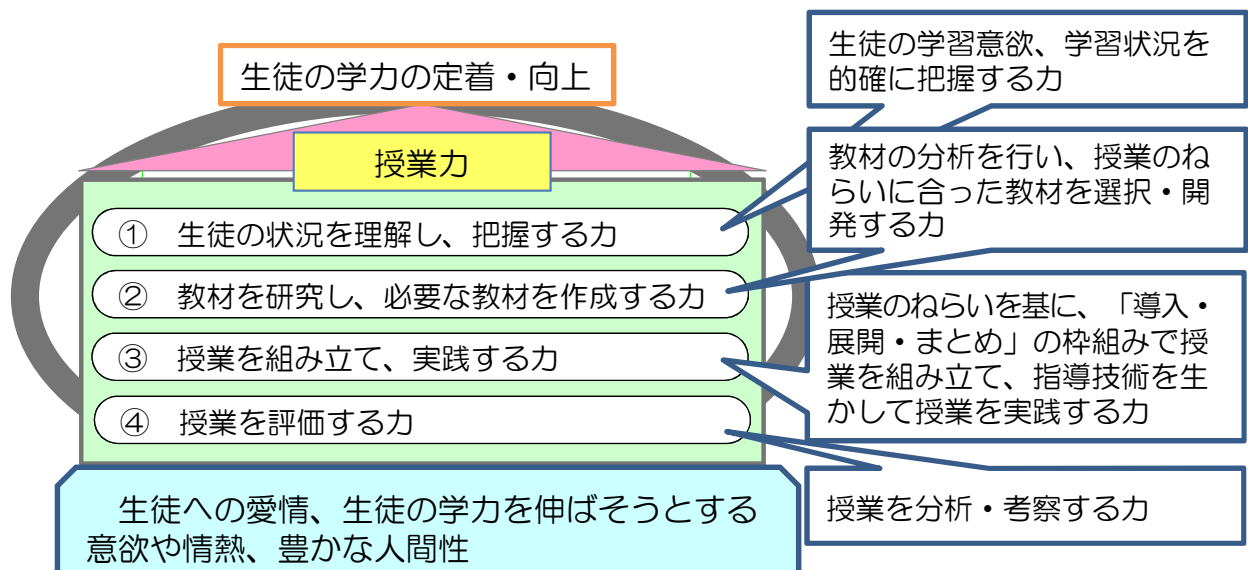
- 授業の開始と終了の時間がきちんと守られている。
- 表情が豊かである。
- 言葉遣いが丁寧である。
- 説明が丁寧で、わかりやすい。
- 発問が具体的で、わかりやすい。
- 生徒の意見を的確にとらえ、全体に生かしている。
- 学習に必要な準備が整っており、生徒が学習しやすい環境になっている。
- 活動の切り替えがスムーズである。
- 個別学習、ペア学習、グループ学習、一斉学習などの学習形態を必要に応じて工夫して、取り入れている。
- 生徒が自分の考えを発表する機会を設けている。

③ 評価に工夫がみられる授業

- その時間の目標が評価の観点に生かされている。
- 様々な評価方法が取り入れられ、多面的に生徒を評価している。

2 求められる授業力

生徒の確かな学力の定着・向上を図るためには、次の①～④の4要素から成る「授業力」を高める必要があります。



3 生徒の主体的な活動を引き出すためには

次の3つのポイントに留意してみましょう。

学ぶことの意義

- 1 生徒自身が学ぶことの意義を理解している。
→ 様々な視点から何のために学ぶのかを伝えているか。

授業の目標

- 2 めざすべき目標を明確にし、生徒が見通しをもって授業に臨んでいる。
→ 授業の目標を生徒に明確に伝えているか。

1、2を踏まえた言語活動*

- 3 言語活動を通して、生徒が主体的に授業に取り組んでいる。
→ 学ぶことの意義や授業の目標を踏まえた言語活動を展開しているか。

生徒の学習意欲の喚起

※言語活動の例

- 体験から感じ取ったことを表現する。
- 事実を正確に理解し伝達する。
- 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- 情報を分析・評価し、論述する。
- 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

4 学習内容の定着を図るためには

次の2つのポイントに留意してみましょう。

学習内容を振り返る機会の設定

- 1 授業のまとめの際に、その授業の学習過程・学習内容を振り返る時間を設ける。学んだ知識は、課題プリントや確認テストなどを用いて繰り返し学習することで、さらに定着する。

学習して身に付けた知識や技能を活用する場面の設定

- 2 学習して身に付けた知識や技能を活用して考えたり、表現したりする活動を取り入れる。知識や技能は、それらを実際に活用することで、さらに定着する。

第2章 学習指導の在り方などについて

5 生徒への効果的な説明、指示、発問

授業での教員から生徒への働きかけのうち、代表的なものが説明、指示、発問です。これらの働きかけがあいまいだと、生徒は何を学習するのか、どんな活動をするのかわからず戸惑い、十分な学習効果が得られにくくなります。

効果的な説明の仕方について

「説明」は、教員が生徒に学習内容をよく理解できるように伝えることです。知識・技能、考え方を話し言葉だけでなく、必要に応じて板書や図表、実物などの提示と組み合わせて伝えます。

ポイント

- 生徒が学習目標に到達するために、何を説明すべきか、何を考えさせるべきかを事前に考えておくこと。
- 言葉による説明をどこですか、板書や図表、実物などをどこで活用すると効果的かを事前に考えておくこと。

効果的な指示の出し方について

「指示」は、教員から生徒に対して、してほしい行動を伝えることです。教員が明確な指示をしないと、生徒たちは何をしてもよいのかわからず、十分な学習効果が得られにくくなります。

ポイント

- 学習目標に到達するために必要な活動と指示内容を事前に考えているか。
- 「手を止めて」など声をかけ、生徒の意識を教員に向けてから指示を出しているか。
- 「いつまでに何をするのか」、場合によっては「だれが」「どこに」「どのように」を加えた5W1Hの明確な指示を行っているか。

効果的な発問の仕方について

「発問」は、教員が、生徒の予備知識や理解の程度を確認したり、思考を促したりするための問いかけです。「これは何か」のように一問一答で答える「閉じた発問」と「～はなぜか」のように多様な答えが考えられる「開いた発問」があります。また、授業のもっとも核となる発問を中心発問と言います。

ポイント

- 生徒の興味・関心を高める発問、授業のねらいに関する発問、図や絵を使った発問、対立・葛藤を生み出す発問、思考の過程を振り返る発問などを事前に考えておくこと。

授業のそれぞれの段階で、説明、指示、発問を効果的に組み合わせることが重要です。その際、下の事柄に留意しましょう。

導入

生徒が「おもしろそうだ」「やってみよう」と思うような興味深い内容で、授業のねらいに意識が向くよう留意する。

展開

生徒が思考する活動を通して、「わかった」「できた」と思うよう留意する。

まとめ

生徒が学習内容を整理し、学習過程を振り返るよう留意する。

6 板書で気を付けること

「板書」には、文字や図で、教科書の内容を整理し体系的に示して学習内容を理解しやすくしたり、生徒の意見を整理したりするなど、様々な役割があります。また「板書」は生徒のノートとしても残ります。授業後に生徒が何を学んだかわかるよう、事前にイメージし「板書計画」を立てておくことも大切です。

板書のポイント

生徒にわかりやすい板書か。

- 文字の大きさ・丁寧さに注意しているか。
- 誤字脱字や筆順に間違いがないようチェックしているか。
- 生徒にわかりやすい語彙や表現を使っているか。
- 重要度によって、チョークの色を使い分けたり、丸囲みなどを使ったりしているか。

一方的な板書でなく、双方向的な板書となっているか。

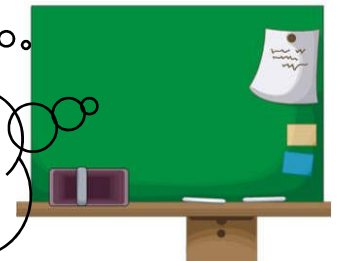
- 教員の説明だけでなく、生徒の意見なども板書しているか。

板書を構造化しているか。

- 矢印などの記号、文字囲みなどは、規則性をもってしているか。
- 学習展開に沿って論理的に説明してあるか。
- 本時の学習のねらいと課題、説明内容の文字や図、生徒の意見、本時のまとめをどこに書くか、学習の流れの沿って板書をイメージしているか。

授業1時間で、黒板一面分が基本

板書しながら説明することは避ける。また、生徒が見やすいように立ち位置にも気を付ける。



7 ノート指導で気を付けること

ノートづくりのためのノート指導ではなく、思考力、表現力の育成につながるノート指導となるように注意しましょう。

ノートにとる内容についての指導

- 授業における学習内容を正確に記録すること
- 授業のポイントを明確にすること
- 自分の考えをまとめること
- 板書にはない、教員の補足説明や他の生徒の意見などを記録すること

ノート作成の工夫についての指導

- 各教科・科目の特性に応じて、項目分け、色分け、レイアウト、下線、矢印、吹き出しなどを工夫して取り入れる。
- メモ欄をノートの右や下に作成することで、必要事項を書き留めやすくする。

ノート指導のポイント

定期的にノートの評価を行う。評価の観点を明確にし、よい面を積極的にほめるように努める。



8 教材の精選や開発のポイント

授業は、生徒・教材・指導者の三位一体で成り立ち、効果的に授業を進める上で、教材の精選や開発は大きな鍵を握るといっても過言ではありません。

教員の都合で「教えやすい教材」を使用するのではなく、
「何を教えるのかという学習内容」
「何のために教えるのかという学習のねらい」
「どのようにして教えるのかという手順」
をしっかりと考えることが重要である。



精選

授業においては、学習内容に軽重を付け、教材の配列を工夫したり、いくつかの内容を統合し、まとめて指導したりするなどの工夫が必要である。

開発

生徒の状況や、興味・関心、問題意識などの実態を把握した上で素材を集め、学習のねらいを十分に達成できるように教材化することが必要である。

9 授業プリント(ワークシート)の作成のポイント

授業プリント(ワークシート)の作成において、次の3つのポイントに留意しましょう。

教科書に対応した内容となっているか。

1 主となる教材は教科書である。授業プリントはあくまで補助的なものであるという認識のもとで作成しているか。

授業のねらい、生徒の実態や学習内容に対応しているか。

2 授業のねらい、生徒の実態、学習内容などに即したものとなっているか。内容を詰め込みすぎたり、逆に物足りないものになっていたりしていないか。

生徒の学習が深まるような工夫が取り入れられているか。

3 単に空所を埋めるだけでなく、自分の考えや気付き、どのような過程で思考したかを記入できるようになっているか。

授業プリント(ワークシート)の構成について

- 教科・科目の特性を生かして、ドリルなど、練習を十分に行える内容となっているか。
- 生徒が内容を理解する助けとなるよう、図、フローチャートなどを用いているか。
- 生徒自身が自分の考えや気付きを書き込むことができるようになっているか。
- 授業を振り返ったり、学習したりするための自己評価欄や感想欄などを設けているか。
- 発展的な資料を載せて、深く考える機会を与えているか。

10 学習形態をどのように取り入れるか

学習形態には、教員の発問、指示等により、同じ内容をクラス全体で学習する「一斉学習」、グループごとに学習する「グループ学習」、パートナーと協力して学習する「ペア学習」、生徒が一人で考え、調べたり学習したりする「個別学習」などがあります。

教科・科目、授業の場面、学習内容等に応じて、どの学習形態を取り入れるか考えてみましょう。

それぞれの学習形態のメリットと取り入れる際のポイント

1 一斉学習

教員の発問に対してクラス全員で考えたり、話し合ったりするので、多くの意見を知ることができる。教員もクラス全体の反応を確かめながら授業を進めていくことができる。

興味・関心・理解の程度が異なる生徒から成るクラス全員で同じ学習を進めるため、教員の授業の進め方によって、生徒の積極性が大きく異なることがある。導入の発問を誰でも答えやすいものとなるようにしたり、ICT等を活用して生徒の興味・関心を呼び起こすよう努めたりするなどの工夫が必要となる。

2 グループ学習

少人数のグループで学習を進めていくので、意見を述べやすい雰囲気生まれる。

教員は、目的に応じた明確な指示を与え、生徒がグループの中で役割分担を的確に行い、一人ひとりが自由に意見を述べ合うことができるような雰囲気づくりを行うとともに、仲間とお互いに協力して学習に取り組むよう促す。

3 ペア学習

パートナーと考えを交流したり、お互いの学習状況を確認したりできる。

教員は、目的に応じた明確な指示を与え、生徒がペアで積極的に活動できるよう、机間指導（机間支援）を行いながら助言を与えたり、個別指導を行ったりする。

4 個別学習

一斉学習の後で、生徒一人ひとりが発展的な学習に取り組む、個人が考えた課題を探究する、個人のペースで作業を進めるなどの個に応じた学習が行える。

生徒一人ひとりの興味・関心が大きく異なり、個人差があることを念頭に置き、それを生かした授業を展開するために、教員は机間指導（机間支援）をしながら、個別指導を行うようにする必要がある。その際、適切な助言を与えるとともに生徒を積極的に励ますようにする。

11 ICTの効果的な活用方法

興味・関心を高めるだけでなく、分かりやすく効果的な授業を行うためにICTの活用が有効です。ICTを活用すれば「知識」だけを伝えるのではなく、「知識の活用方法」まで身に付ける時間も確保できるので、学力の向上が期待できます。しかも、ICT活用による「分かる授業」は、短時間でも毎日の授業の中で継続的に行うことで効果が表れるといわれています。

1 授業におけるICT活用のすすめ・・・”ぱっと”使って、わかりやすく教える！

- 「拡大提示」し、生徒の意識を「焦点化」し、「指示の徹底」を図り、「分かりやすい」授業を実現
「課題の指示」「手本となる動き」「解き方のスモールステップ」「生徒のものと同じシートへの書き込み」「理解のポイント部分を付箋で隠したもの」等を大きく写す。その結果、学習課題や思考過程等がクラスで共有され、生徒のつまずきが少なくなり、「分かりやすい」授業を進められます。
- 「板書時間の短縮」ができ、「授業時間の有効活用」が可能
事前に用意したプレゼンテーションソフトウェア(マイクロソフト社パワーポイント等)のスライドやワープロで作成した授業プリントをテンポよく提示することで「授業時間の有効活用」が可能となります。また、「板書の時間を短縮」し、生徒の活動を観察し、細やかに指導することもできます。

2 使用するICT機器は、・・・今、学校にあるものを活用！

学校にあるプロジェクター、パソコン、デジタルカメラ、電子黒板、スピーカーなどを活用し、文字や静止画像だけではなく、動画・音声などのより実体験に近い教材を授業に用いることができます。

- デジタルカメラを直接プロジェクターに接続して、教科書、ワークシート等をそのまま映すなど(パソコンを使う必要なし)。
- 事前に教科書や資料等をデジタルカメラで撮影しておき、それをプロジェクターで映すなど(教室での接写の手間を省く)。



- ★接続ケーブルをつなぐだけ。
- ★持ち運べるシート様スクリーンあり。大判用紙も代用可。黒板に直接写す手もあり。
- ★接写用スタンド(¥1000程度)に固定が便利。

3 機器の設置に時間を取られないコツ！ ICTを活用して効率的に教材開発！

- 必要機材はまとめて、かごやバッグに入れたり、ワゴンに乗せておくと運搬・設置が楽に行えます。
- 生徒の「ICT係」を決め、授業前に生徒が機器の準備をしている学校もあります。
- 授業で活用できる効果的なデジタルコンテンツの開発が進んでいます。
 - ※ デジタルコンテンツのリンク集は「やまぐち総合教育支援サイト」(先生のページ)にあります。
- デジタル化した教材は一度作成すれば保存ができ、修正もしやすく進化する教材となります。

4 ICTを活用した授業例

参考「教育の情報化に関する手引」（文部科学省、平成22年）等

- 国語
 - ・古典に関する絵画などで博物館・美術館のウェブサイトで見覧可能なデジタル画像（例えば、源氏物語絵巻など）を提示し、時代背景や風俗等を読み取らせ古典に関する関心を高める。
 - ・古典や文学教材を扱う授業において、インターネットなどを活用して様々な作品と出会わせ、興味・関心を高める。
- 地理歴史
 - ・単元に関する楽曲、絵画・写真等を鑑賞させて、地域や時代の背景をつかませる。
 - ・フラッシュ型教材を用いて、課題を瞬時に次々と提示して振り返り、理解と定着を図る。
- 数学
 - ・教科書の問題文を拡大提示し、学習のねらいを確実につかませる。
 - ・ワークシートの設問を提示して、グラフや図形に書き込みながら説明する。
- 理科
 - ・ジェットコースターの動画を示して、運動の法則についての関心を高める。
 - ・安全性、場所、時間、費用などの関係で授業中に行うことのできない実験や観察等をデジタルコンテンツを用いて提示し、科学的事象への関心を高める。
- 外国語
 - ・外国のテレビ番組などを見せ、英語によるコミュニケーションに興味・関心をもたせる。
 - ・身近な場面における出来事や体験について、デジタルコンテンツなどを活用して映像や静止画、イラストを提示して、自分の考えや気持ちなどを英語で書かせるようにする。



5 タブレット型端末の利用

- タブレット端末に板書内容や提示する写真などをあらかじめ記憶させておき、プロジェクターに接続し、授業で活用する方法もあります。パソコンをプロジェクターに接続するより準備が簡単です。

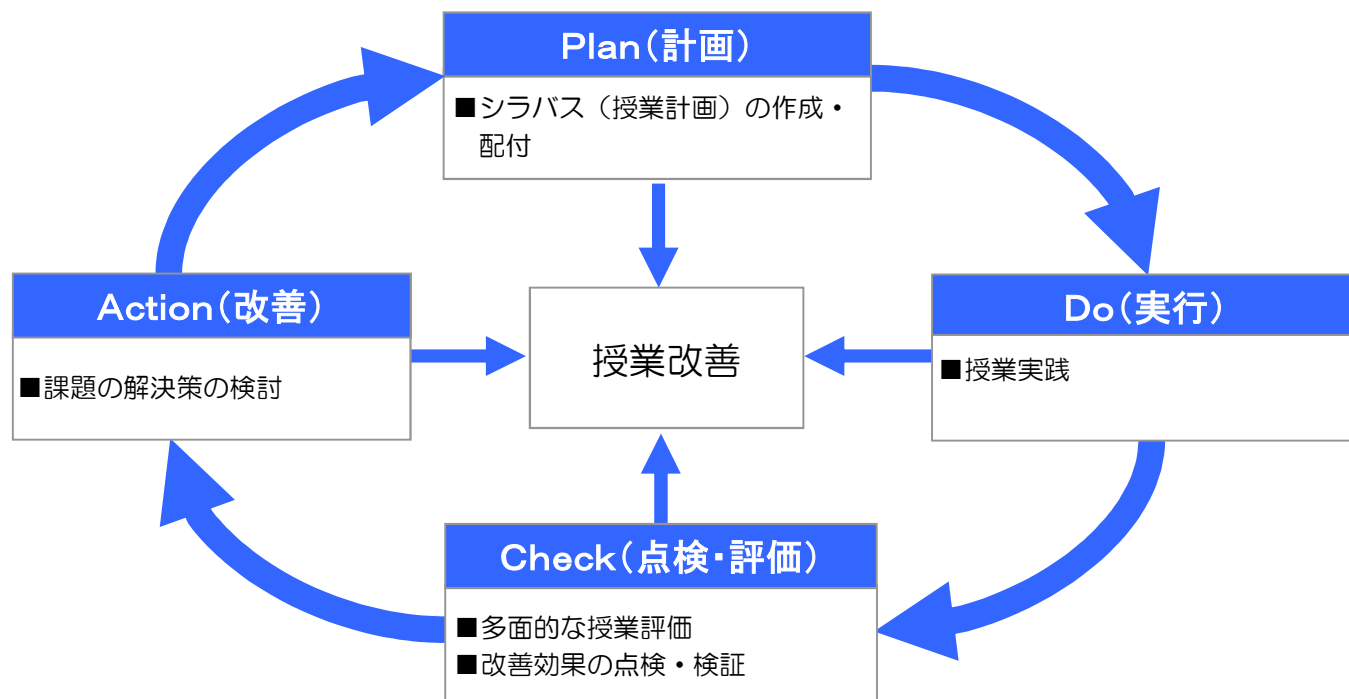


第3章 授業の振り返りについて

12 授業改善の効果的な方法

PDCAサイクルに基づき、授業の計画を立て、授業を実践し、様々な授業評価を通して、授業改善を図ることで、授業力の向上につなげることが大切です。

年間を通した授業改善のPDCAサイクル



● Plan 「授業計画(シラバス)の作成・配付」

生徒が主体的に学習計画を立て、意欲をもって学習に取り組めるよう、各教科等の授業の目標・学習内容・学習方法・評価方法を生徒・保護者に十分説明する。

● Do 「授業実践」

授業計画に基づいて授業を実践。学習の評価については、観点別の評価規準を設定する。

● Check 「多面的な授業評価」

生徒による授業評価、研究協議をともなう授業研究、授業公開等を通して生徒や自校・他校の教員、保護者等による授業評価を実施し、授業方法や評価方法のチェックを行う。授業研究については、初任者研修・10年経験者研修等との連携を図る。

● Action 「課題の解決策の検討」

教科会議や校内研修会等で、上の「Check」で明らかとなった課題を総括・検討し、改善に向け、次年度の授業計画に生かす。

単位時間ごとのPDCAサイクル

単位時間ごとにおいては、その時間の目標を明確にし、指導案を立て（Plan）、それにしたがって授業を行い（Do）、その時間の目標が、どの程度到達できたかを評価し（Check）、評価を基に指導上の課題を検討する（Action）というサイクルになります。

このように、単位時間ごとの授業においてもPDCAサイクルに基づき、授業の工夫改善を図っていくことが大切です。

13 授業評価の効果的な方法

授業改善を効果的に図るには、①「生徒による授業評価」②「授業者自身による授業評価」③「他の教員による授業評価」などを組み合わせて取り入れるとよいでしょう。必要に応じて、下の授業評価の観点の項目を参考にしてください。

授業分析シート

平成()年()月()日()曜日 第()限

学年()組()教科・科目名()教室等()授業者()

授業の自己分析		自己分析欄
◇ 分析項目ごとに自己分析し、それぞれの評価 「4:そう思う、3:どちらかというと思う、2:あまりそう思わない、1:そう思わない」で、 自己分析欄に数字で記入してください。 ◇ 「この授業では評価できないもの」については、－を記入してください。		
評価項目		
シラバスの活用	シラバスに示した目標・評価方法・授業計画に沿って授業を実施している。	
授業準備	学習のねらいを達成できるように、教材の精選や開発を十分に行っている。	
授業展開	授業の開始と終了の時間が守られている。	
	授業の導入で、単元の到達目標を踏まえた本時の目標を生徒に説明している。	
	授業で学習意欲を喚起するための工夫を行い、効果をあげている。	
	生徒が思考したり、判断したりする活動を、適宜、授業に取り入れている。	
	生徒が話したり、書いたりする活動を、適宜、授業に取り入れている。	
	学習内容に応じて、グループ学習、ペア学習、個別学習などの学習形態を、適宜、授業に取り入れている。	
	ICTを効果的に活用している。	
	生徒は全員、授業に集中している。	
	発問や机間支援、ノート観察等により生徒の反応や理解度を見て、修正しながら授業を展開している。	
	授業中に、生徒が自己評価する活動を、適宜、取り入れている。	
授業のまとめ	本時の学習内容の確認を行い、生徒に自己評価させ、充実感をもたせている。	
	次回までにやっておく宿題や予習・復習など、家庭での学習内容を具体的に指示している。	
授業技術	板書計画を立て、授業の終了時に黒板を見ると、その授業の内容が概観できるよう工夫している。	
	生徒の理解が深まるようなプリントを作成して、効果的に活用している。	
	声の大きさ、話す速さ、間の取り方、言葉遣いに十分気を付けている。	

授業を振り返ってみて

授業の反省点と課題及び今後の改善点	
-------------------	--

第4章 学習評価について

14 新しい学習指導要領における学習評価の観点

現行の4観点の枠組みを基盤としつつ、学力の3つの要素を踏まえて、次のとおり評価の観点が変わりました。

学力の3つの要素	今までの評価の観点	新しい評価の観点	詳細
基礎的・基本的な知識・技能	「知識・理解」 「技能・表現」	「知識・理解」 「技能」	「知識・理解」の観点は今までと同様、各教科において修得した知識や重要な概念を理解しているかどうかを評価する。 今までの「技能・表現」で評価している内容は引き続き「技能」で評価する。すなわち、式やグラフに表すこと（算数や数学）や、観察・実験の過程や結果を的確に記録し整理すること（理科）なども含めている。
知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等	「思考・判断」	「思考・判断・表現」	各教科の内容などに即して思考・判断したことと、その内容を表現する活動（記述、発表、討論など）とを一体的に評価するため、「思考・判断・表現」としている。
主体的に学習に取り組む態度	「関心・意欲・態度」	「関心・意欲・態度」	各教科の学習内容に関心を持ち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を評価する。



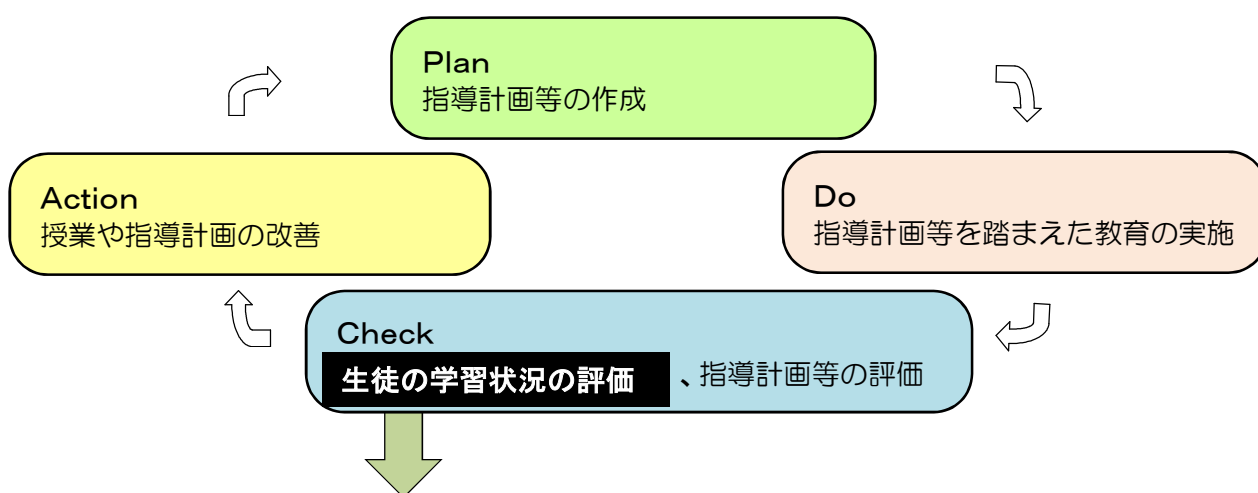
15 学習評価の基本的な考え方

評価に当たっては、教育活動の特質や目的等に応じ、評価の方法、場面、時期などを工夫し、生徒の成長の状況を総合的に評価することが重要です。評価が生徒の学習の改善と教員の指導の改善に生かされるよう、ポイントとなる点を整理してみましょう。

【「指導と評価の一体化」を意識した授業の実践】

評価は、生徒にとって自分の学習に対する成果を見つめ直し、今後の学習をより一層充実させるための指標となるものであり、後の学習支援に生かしてこそ意味があるものとなる。つまり、指導と評価は別物でなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である。

指導と評価のサイクル



評価を行う上でのポイント

- **分析的な評価、記述的な評価の導入**
総括的な評価のみではなく、分析的な評価、記述的な評価も工夫する。
 - ※総括的な評価・・・全体的な達成状況を総括して簡潔に表す評価法。各教科の「評定」がこれに当たる。
 - ※分析的な評価・・・達成状況をいくつかの観点から分析的にとらえる評価法。観点別学習状況の評価がこれに当たる。
 - ※記述的な評価・・・生徒のよい点や特徴を文章で記述する評価法。「総合的な学習の時間」の評価がこれに当たる。
- **評価の場面の工夫**
学習後のみならず、学習前の生徒の状況の把握や学習の過程における評価を工夫する。
- **評価の時期の工夫**
学期末や学年末だけでなく、目的に応じ、単元ごと、単位時間ごとなどにおける評価を工夫する。
- **評価方法の工夫**
評価の方法は、ペーパーテストのほか、観察、面接、質問紙、作品、ノート、レポート、実技などを用い、その選択・組合せを工夫する。生徒による振り返りの自己評価、生徒同士の相互評価なども積極的に取り入れる。

※各教科の具体的な評価の観点や評価方法については、「授業づくりと評価の手引き（実践編）」を参照してください。